

• 0 1 2 3 4 5 6 7
• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 JAPAN

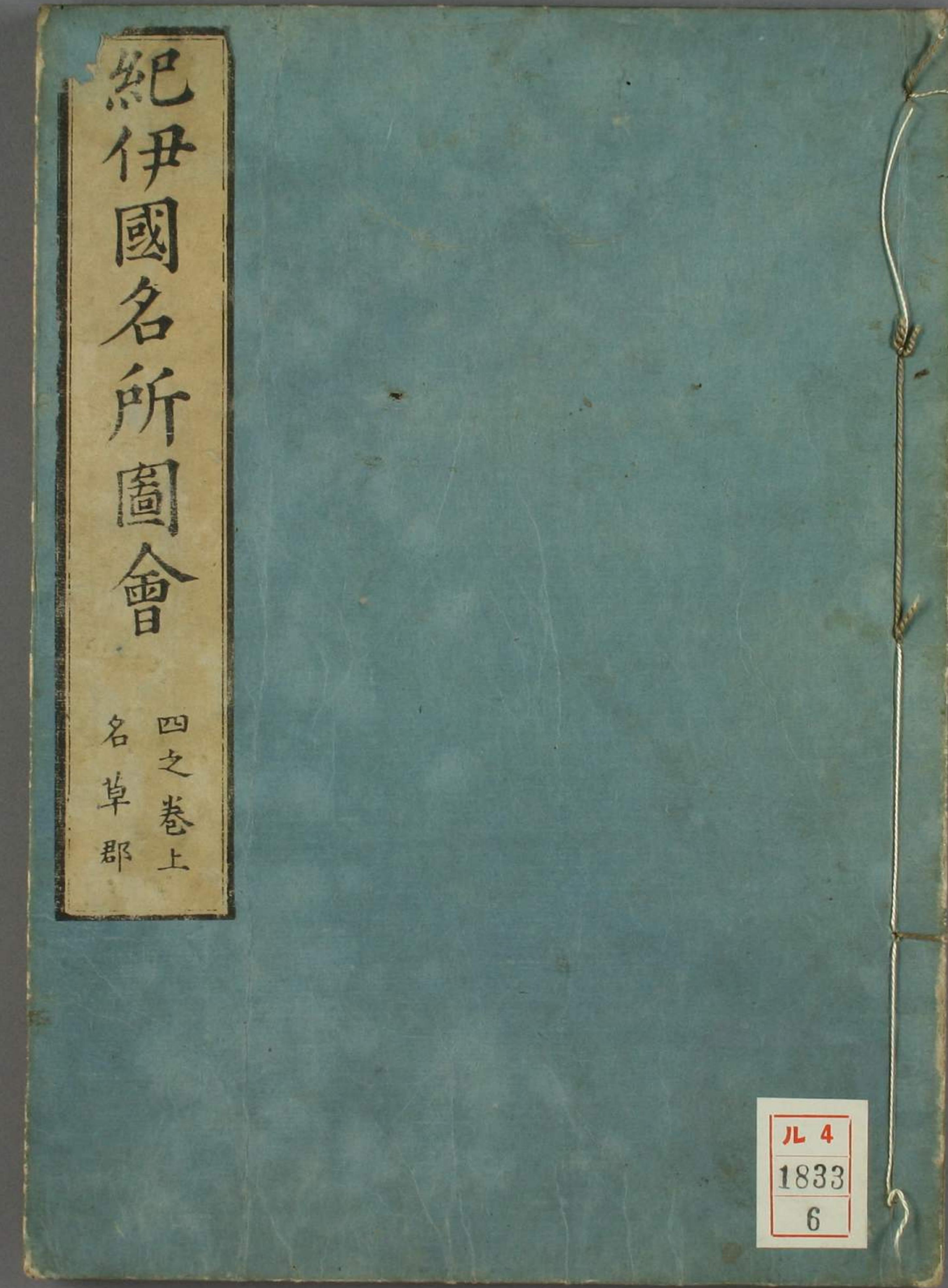
紀伊國名所圖會

四之卷上
名草郡

ル 4

1833

6



ル4
1833
卷



南海奇勝
紀國會
二集 全部五卷



紀伊國名所圖會卷之四上目錄

地藏社

德勒津

若宮八幡宮

正殿
拜殿

透垣
繪馬舍

神樂舍
御饌

本地堂

神宮寺

太鳥居

志保能宮

御供所

神宮寺

本地堂

太鳥居

地藏社

池

白山權現

蛭子神

御香宮

天滿呂

稻荷

熊野權現

高良社

日吉山王神社

金毘羅權現

曝井

高倉寺

幡降寺

大楠丸

八幡祠

元亨寺

己卯ノ橋

高御前神社

裸所

八幡宮

射術甲科

夢妙幢寺

弓天神社

法照寺

溫泉跡

姻山

栗栖寺

栗栖一ツ物

丹生神社

奈宿跡宅

高橋神社

忍光寺

和佐王子

古城趾

太田古城跡

野の邊戸

地藏社

德勒津

若宮八幡宮

末社

紀氏神社

十五社明神

蛭子神

三十番神社

金毘羅權現

日吉山王神社

曝井

栗栖寺

栗栖一ツ物

丹生神社

奈宿跡宅

高橋神社

忍光寺

和佐王子

古城趾

太田古城跡

野の邊戸



鈴蟲引

百種秋蟲耳根鳴
唯有鈴蟲似鈴噲
中宵技廢鳴不止
啼徹四更月初傾

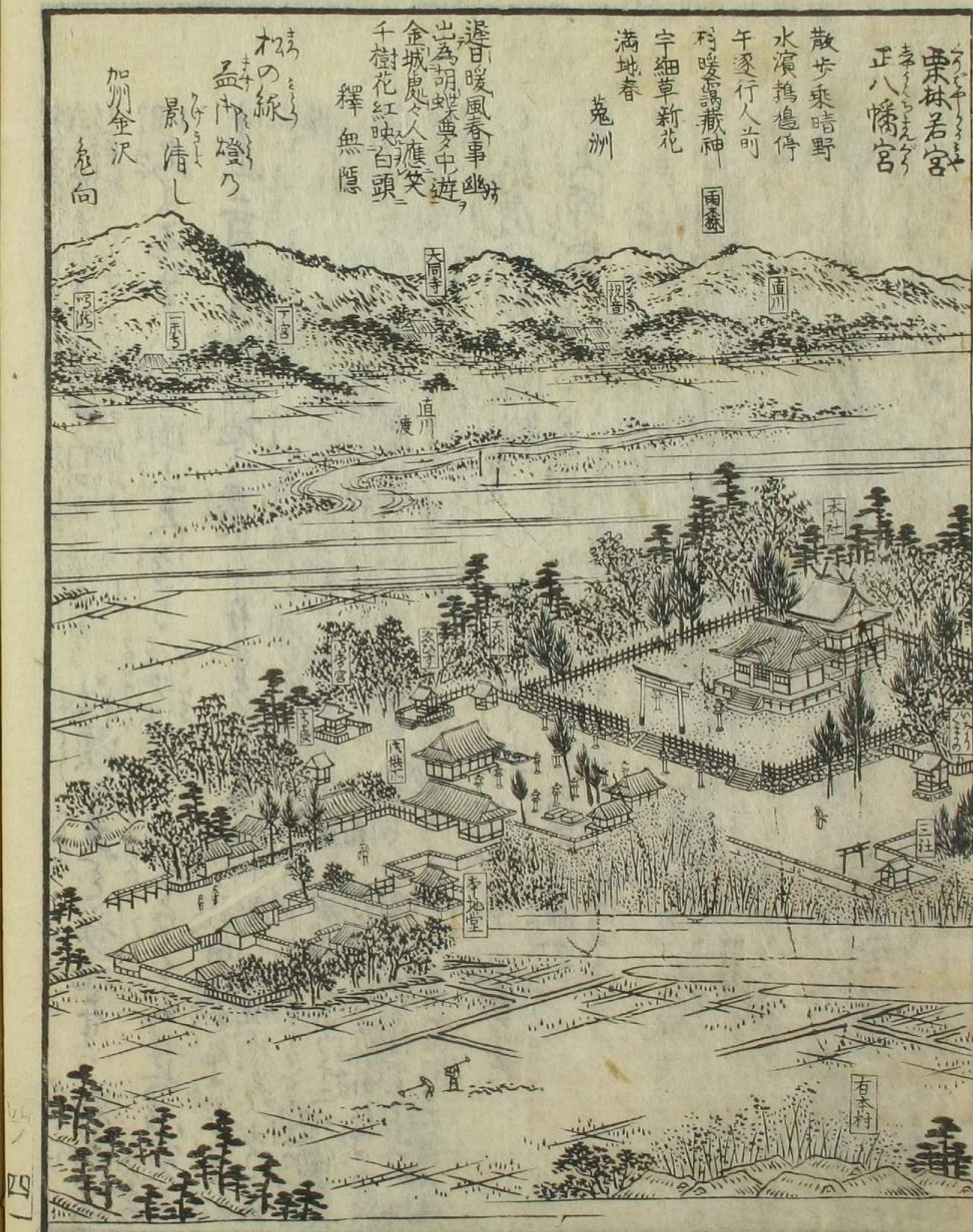
滿園秋声汝町安
三子籠中厄此生
異能身物皆然

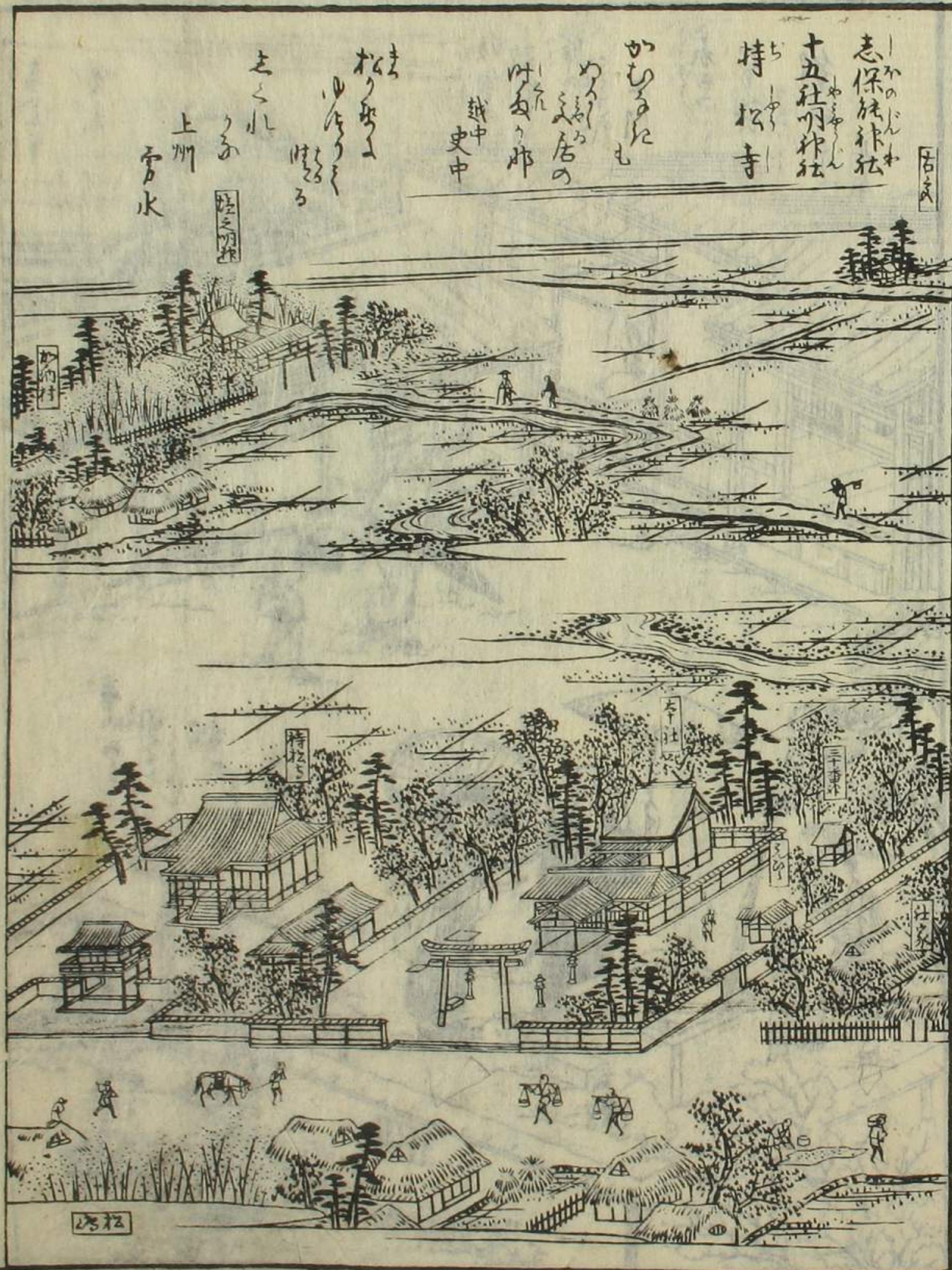
象齒窮腰前成衢
明漆圓倣吏達此理解道爲
善不近名那誠蟋蟀不解音
卿卿唯便懶婦驚十月薄寒

肅其霜健羽長脚倒縱橫異
轂凡音先等耳無能無憂

十字作通衢
可南又可北
地藏爰愛流
不使行人惑

素堂益





まことに
方を二栗^{うるす}極^{きわ}の中^{うち}かひくに曝^{さら}みのたまへよりむとこに妻^めも我^わ

紫雲山栗拙寺

○ちいさな後の宿

白鳥山教王院

○
眼檀

七年大和太田村
西の里山中

とくらちもううう

トトロに地井のそとを
あひゆき教へ

半塔山門

○大師小堂

小堂
まことねやう

東籬惟恭



梵閣憑高觀望 眇無人出 僅絕置詳園中
祇樹爭春色臺上空香送兩花野濶青黃分未麥
山因濃淡見烟霞此情難詰當路子車馬塵間醉物華

烟山

下栗極大樟丸

可令早領知紀行國固歸庄下司鵠羊子人送江事

右人為熟切之賞所定約也早守先例可致妙法之狀如件
建武四年九月廿六日

年記の下又
引公の花押あり



高橋 温泉 車両

神社の舊地きゅうちを尋ねて、
御子神みこみを祀まつる。

村外と岩

おもひへり
いふゆよ
よみ

附りあり

はむちやん
ひめ地平組
人のせうる
まよまくへ
せうくじゆ
ゆふゆのな
くわのこわ
くわ

後間あうた
の名をくへ
唯天平新
補へ

儀式ノ書
神社トニ
宝字ニシテ
御湯紀

井石ありと
年のかず
と
れづか
の
木

十ヶ 基 之 の もの

村の産出よりては久々毎年六月

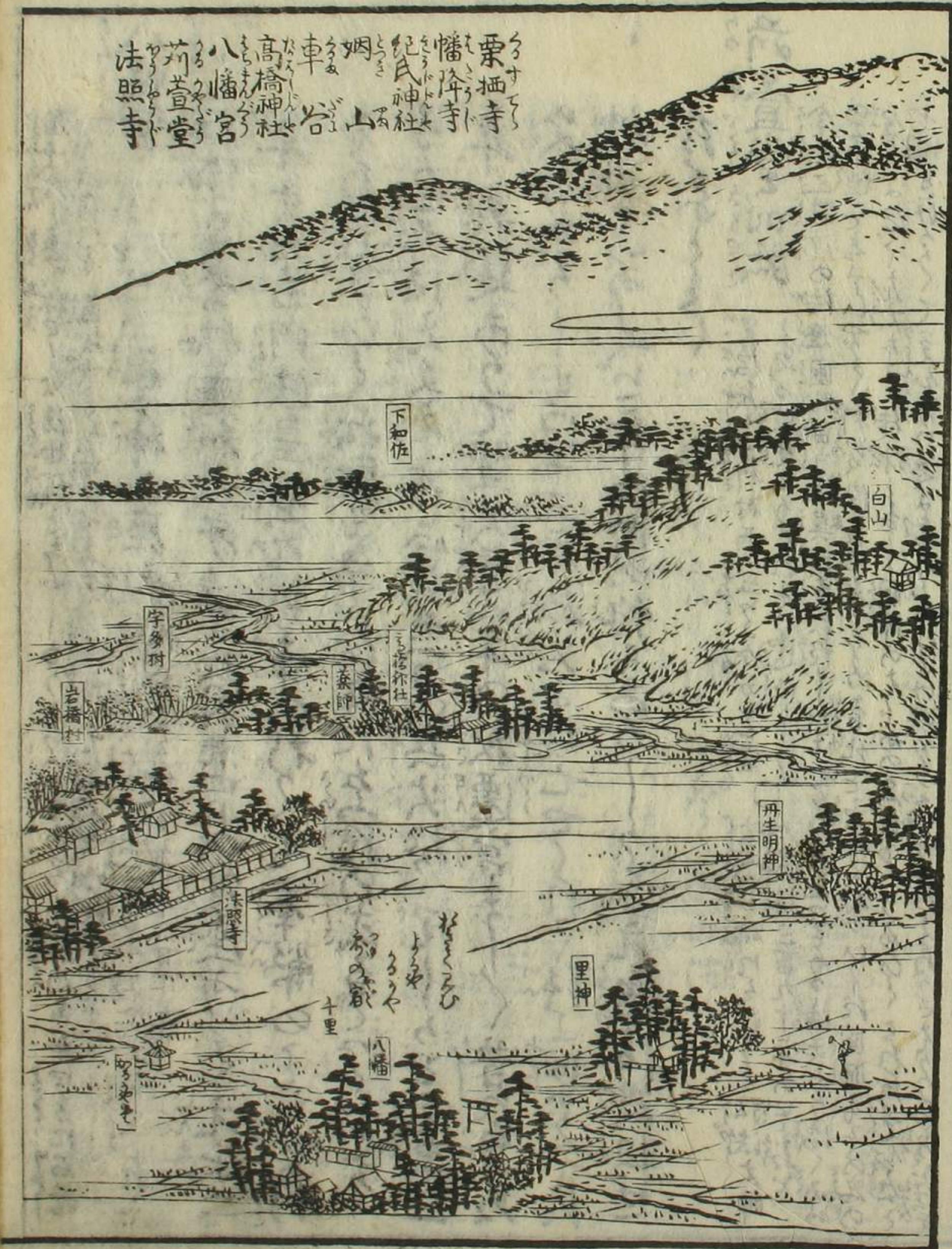
接姓

日の鏡門

日云一五
航速
時令
たな

橋大冲
橋姓

祐之乃之



八幡宮

苗安社と並称する清世一社とも云ふ。境内を廻る方に石塔
あらまん鉢ありは内ノ角館にて御不吹御作也
日村少よありまち
八幡宮 犀之神二座
中ノ御子も御子也無事也
八月十九日

祐作よ云當社へ應和元年辛酉十一

應和元年

年十月白河法皇御内幸のわくも奉幣のとやとい
あらせたまひくれりもきじゆにをれの式をどとせごそう
あり其の後又え年一月廿一日の丘火れりてとえ亀三
年再達あつて翌々年秋遷宮すく昔れ
文居たらくも口十三年故よりよ焼亡されそ經よ聞ふく
神田もあくへり十五町の條もありとど荒廢後沒收せ

前宣堂文集

宣室の御跡
奥松山の村西の生家より力ヤニ堂
とくづはせありこれそめば江をう
金澤ニ昧度の法燈圓由良の娘國寺に付
のち他をもとしす東洋の染衣の如きを化と
尊よしとたれ徒然とみり圓師のもとめの名
ぞみしきうくて是がいふよちゆくにうけの
古文書

北山の居候は御賞の聲も聞て本ひ難候きゆけと
とあん間もくと縣よりひくすすとろとくひくとめく唯心うちかじて称
姓せのを隠とぞ遙よけり是れ跡を坐もの墓址あらこてに附治中村
ひづりの非吏事あらうみ坐引とひがひうとへり所造建一向寺をま
キトこれもまた

あまう宗勝のけたに退転するをもて營建はる所の造場
其後矢絣をく天支の五事よりてどもてじ造建たりけ
るは十九年四月證か至人馬公の造場にて向のまどり當
院も立よせたまつる

あそん
えんわさくすよのいそ

新入新太夫教佐卷 宿亦子孫
御村より○圓判連署のをくわて今れ商経歴
れねるあり下へく栗栖村
大輔の下にれる
尙家之内高持神社行住座已來の事
下て後世ありひへ湯棲たつとも神也
○達か空人跡と跡
六家名跡某五三月日向本領名号云登業等
尙家又松彦の由縁

年三月のこころ入へてひ山園(ちちやう)にいたりたるにあひけまよ四月八日にて京都に歸り才子と號す
御は止宿ありて野中を今永積村に在りてよちトセたまひ其後すみうち
山家をはしあとおひをまとひよまた枝宿(えだじゆく)まくけりあつまよそはく天子下千戈のちまことさき
くくく安らかにいたりてうんをほの下向あくともひくよ程役のてぬれりやされ
さあがく抖ねれ仰のちとくとくわくわくも雨(あめ)よふうできたりてうなづかひをまくまく
つゝ義豈と云ひて紀の川よ生むひやくわく家よ清くまくまくうべ空人を志のあ
ざんうでさとたまひがくはくをとそやまとめ与へたまよ筋るうとひ人山家の山にせせ
所よとく今の一山家山の所よとたよからうなりのたうり

山の西より山より温泉涌出しきるの湯より一石橋ありてやうそ橋にもせむ
名づけたり村老の傳よとては橋よりけたるをもせむとうつてたふちうりて
天文の七日前よりの社司りてくられふれよせとめりて山よりちひづくら
はへりひづくらと放ちぬゆもくとねじくとまくわくとくわくとくわくと
あくべ里人おもそなづりとあくべ里人おもそなづりとあくべ里人
○東籠を支活上へ庚戌歲四月十九日壬寅

内官役支丈工作科末濂成敗所之事
信濃國越後國 中畧

宇多野原までは途ひの舞
八幡宮（まらきんぐう） 下わ伏村（ふくそん） 仲哀天皇（なかめてんのう）
八幡宮（まらきんぐう） 仲哀天皇（なかめてんのう） 猿林天皇（さるはやまてんのう）
一村の森神（いっそんのもりじん） かして乃至（のぞむ） 每年八

たうつみのき
うどん
やんき
さ

清涼山慈光寺

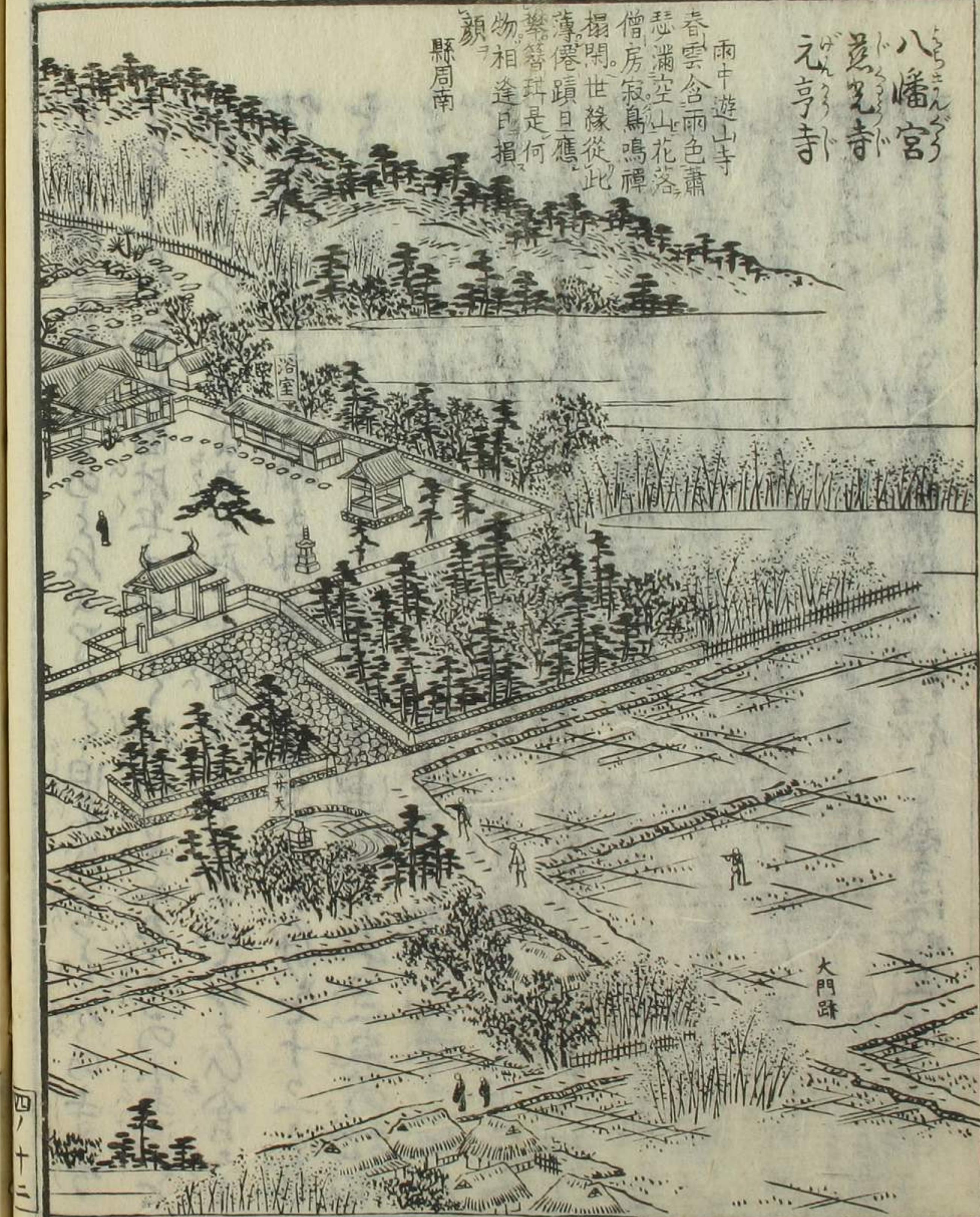
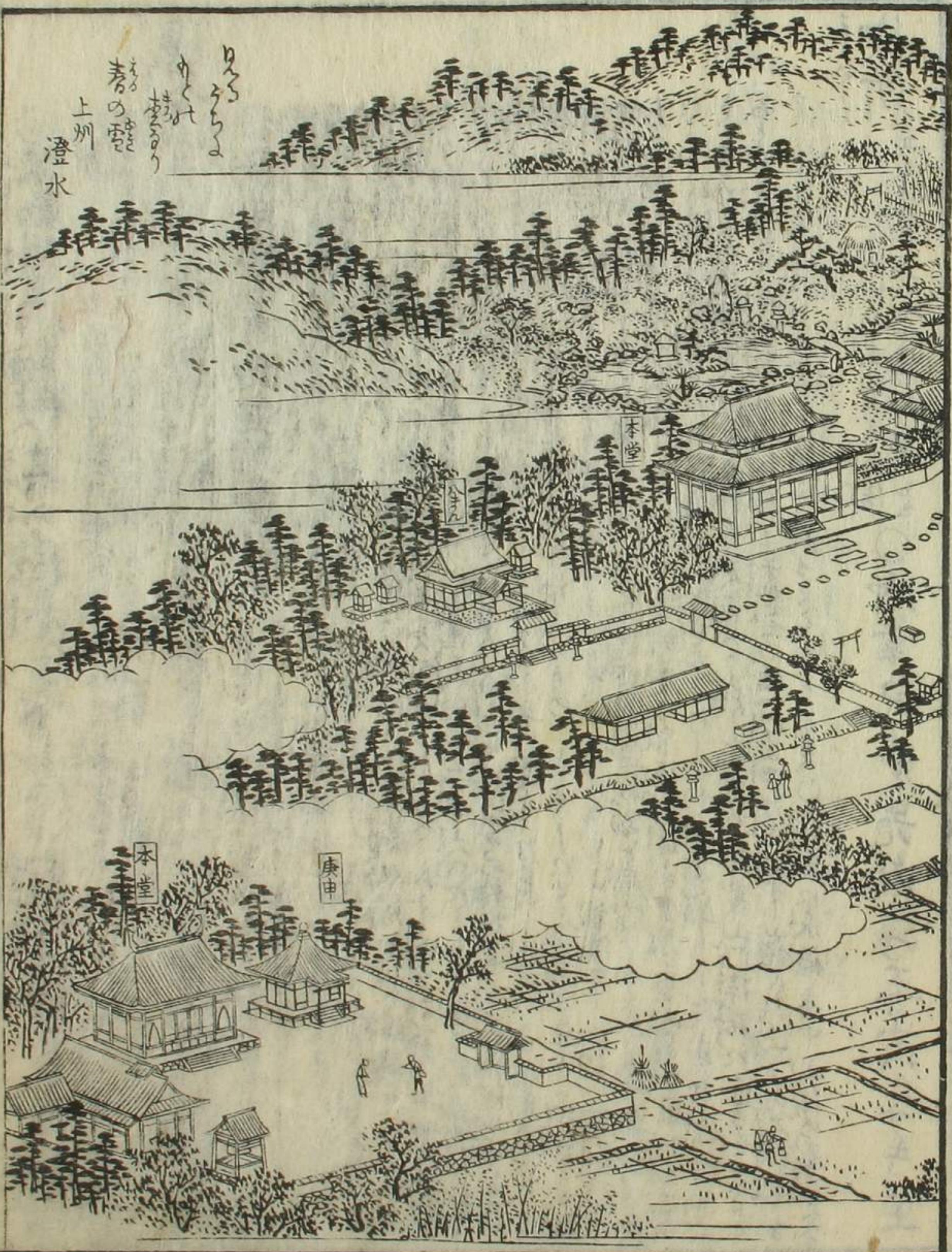
一面歎世音菩薩

卷之十

○大師堂　山岡半八が法師の三上を祀る所也
○子院　ぢひうちたとゆのねう殿のとよあると云ふとて承て立てもん
○慶昌菴　なまくわにあう○天傳ち廢して金田ともう○淨福　じゆふ年中お詔書
○安居寺　けいじとて四もと人を人を井と　山岡半八の別當也

の輪ぬから靈地ありべし
え弘達武の丘葬火合
墓碑つまよそんやう
羅アモク廢類トシタガラの奉堂のミ達ル
トガタマニ空文のアロモ序ヒヨウ別所快園比立する靈跡乃
室トトカタスんと云ひゆく跡トシキトト陽を當りちに當りる也
とつとも中興の主懷未だよアビ其徒才をもタニセの

比丘は佛より下るこのことによつて曰く「阿彌陀の寺号
とあらゆる三世の園比丘よもつて檀越ある者十手の奉事と
易かることありて大よ力とぞ」資財傾も奉毛ねじ食をと
後構にアラキテアサモ再達一住者のサリゲをナリよ存
ちりとみやけり寺よりトヨウ以降凡船連綿とてニ密の地消
ミトマテ首尾案蔓延とく一宇の權をよき誠よ圓わ
如來律院の溫觴とくべ中興やづく百日餘年十九とヒツ
とも様也ひ首尾易まずふ歲の古松霜をまくに會ふ所の
萬竿の脩竹室よ燈へて吹風とて「すよ声を
聞りニテおこなうば林外也遂にく頗る匂氣の精良
凡の事ともしきがよだよたら文土登アテアビヒセシ
わきうふつてん○付賓 西部大曼多羅（軸幅五尺裏を定承土年を
はのあみ寄附○白檀本辨財天（御はるび）○愛染印王（弘法大师講義）



○不動明王の梵筆
立余放學とづだ。古石塔二基
○一基は延平七年四月水原致乃母本の文字より其文書中にて
四己五丁の文字とてうむ金鉢損して三基の一基は蓋口常く缺て一字もあらず
掩谷元亨寺
林家より傳來
○奉写十一面觀世音菩薩
此像長二尺六寸
す

○不動明王の開筆立余放卷玉づば
○古石塔碑文一巻
○一巻ハ正平七年四月水原致氏母ホの文字もあつて中へもえだ。一巻ハ氏母碑文四已五ホの文字もあつてうちも金缺損して玉づばの一巻ハ益々口常く缺けて一字もあらずれ
元亨寺
林家ちよ馬鹿に
○本寺十一面觀世音菩薩
木像長二尺六寸
木像高一尺八寸

未放卷と云ひて○古石塔波寺ニ有
母の文字と云ひ其入あひた中で一
字も見えぬ○一巻は益々口當
て一字もあらず○
○本寺十一面觀世音菩薩す

林泉の
内れあら
民たる者
長二尺六

御幸記より先參山王家へサキ王
御幸記より先參山王家へサキ王

子暫相待之間御幸先出儲御被所口サ井ノ口ト云ノ日前

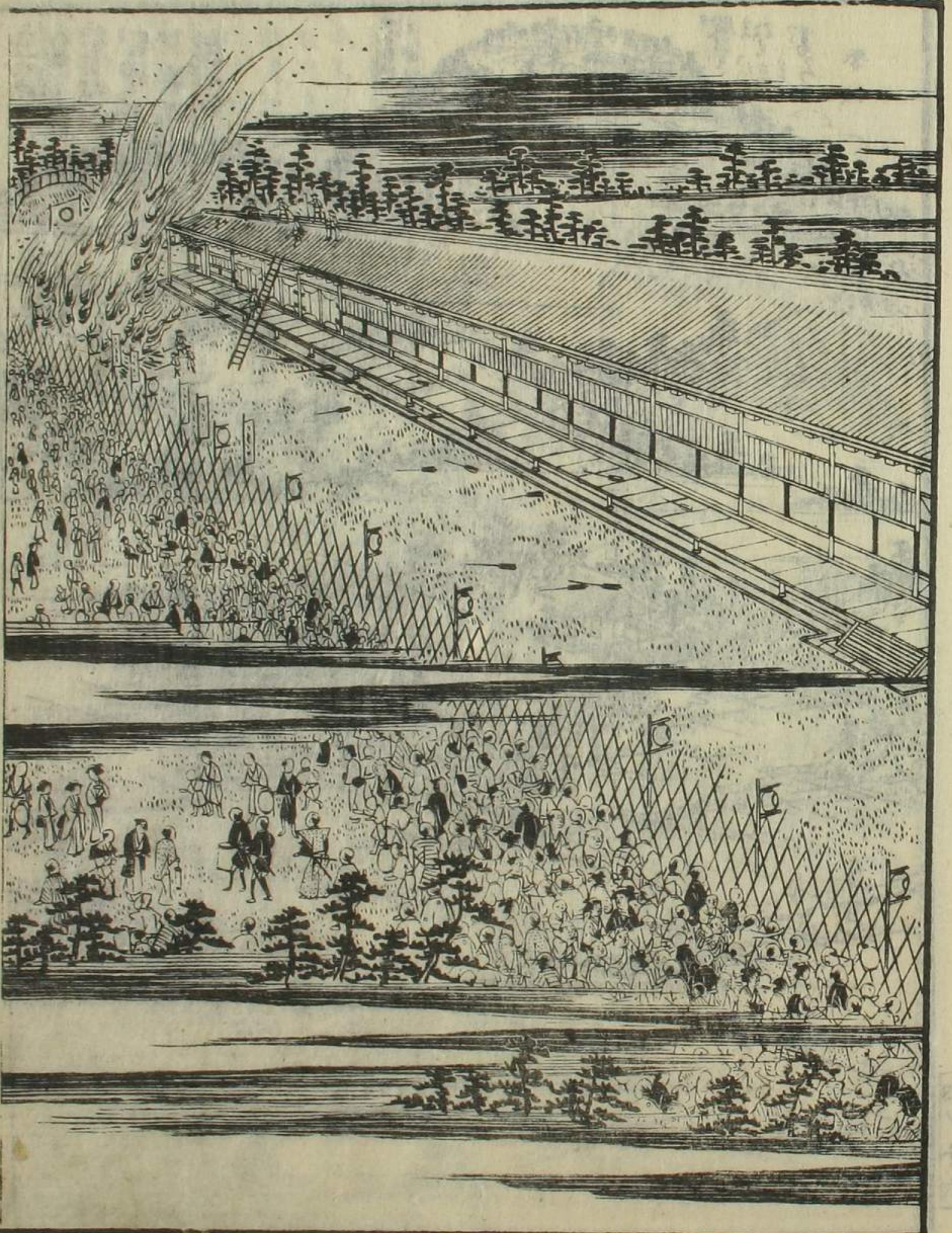
官序奉幣予爲侍奉幣使小時於此行有御禊
氣鎮神社御宜村東
二月九日紀之水紀直祖天御食持神九月九日
每年九月廿日

○本因付名帳云徒四位上氣津別付。社付よな直日付と清月付とうの又
あるひれ付の上より付と氣津比古の付と。氣津乃付のまわらも氣津比
古の付たりともつうちばくへりくんゆく付とまわらが付よつて、而仕よ達
付とまわらが付よつて、而仕よ達

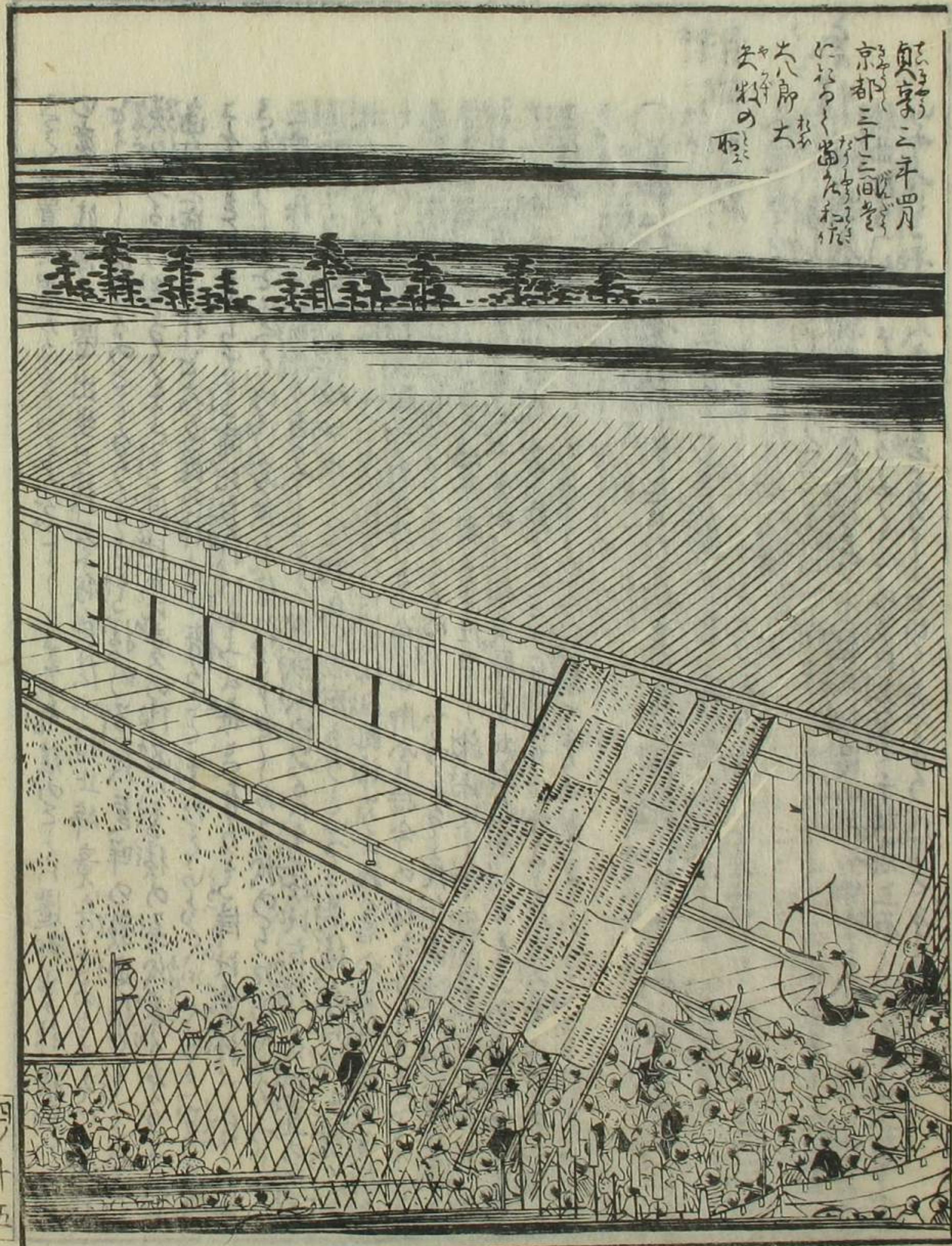
和佐王子 日村南の山にありて寺有り
高御神社 日村の東山の山にありて寺有り
高御神三座 三集は賣神
五ヶ村

驅除するまゝに小兒痘瘡の憂と覺ゆるめあつて
あくちやあくちやあくちやあくちやあくちやあくちや

射御甲科（アシテイカ）
久喜三ノ年四月廿七日京に達幸王院ニ十二万半れども大數を過
え十三奉五十九鉄八十百二十ニ奉たゞて山邊の甲科と云ひ
太八郎ちよんとくとみのわらばんの者也
通じてのうじゆるり○けしのち儀を又アツアツ
多々手取朱ニスル様子一枝民飢渴の用ひ体と立ちきりく如



四十五



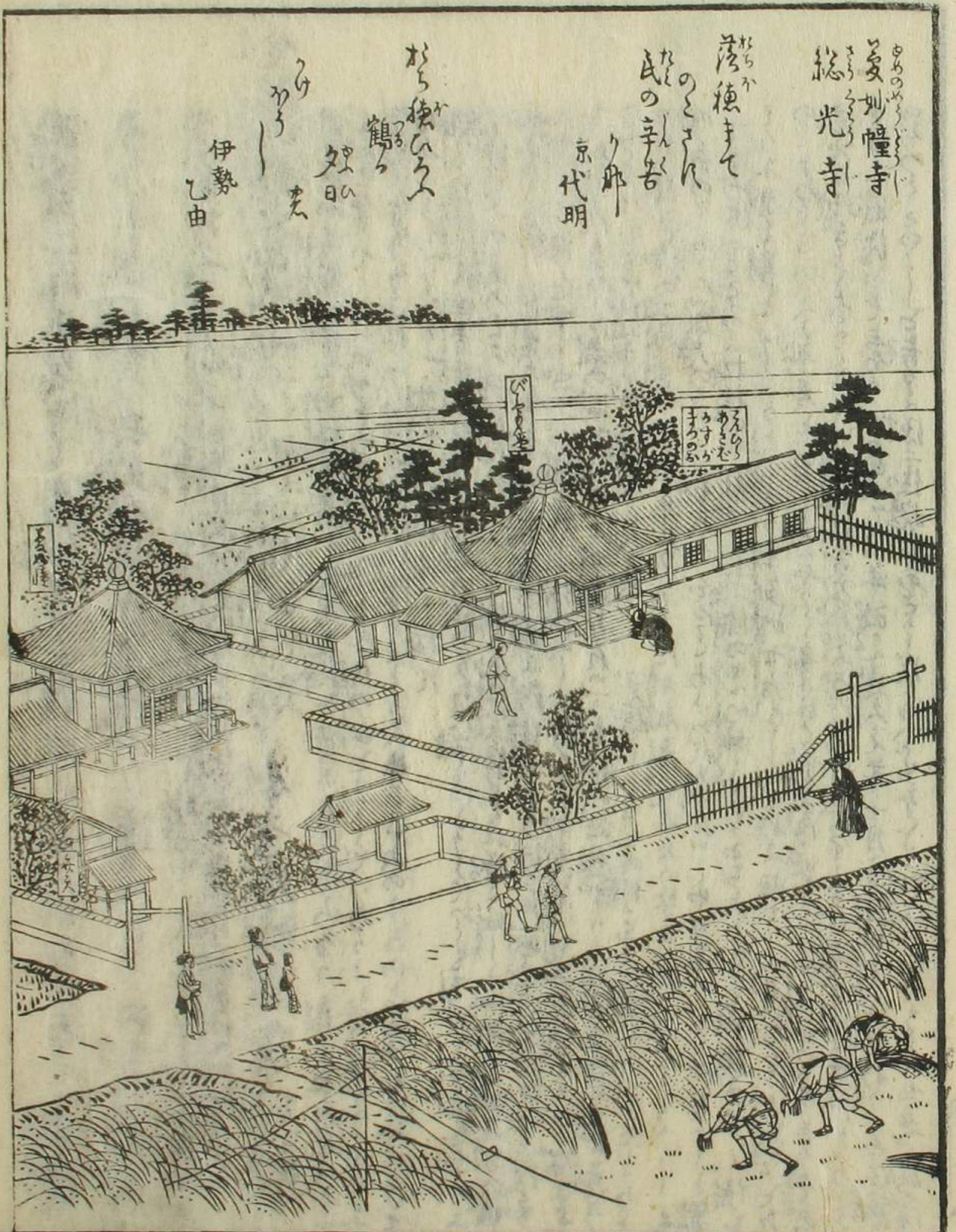
寅年二月
京都三十三間堂
にねりとて當たる所
大八郎 大
天狗の所



古城の跡

城の跡
處にあり、支山へ出郡の高ひ寄方に森々と翠微を
見てもちくふ景す。船にて北へ茶屋、早王寺、早
箱山、若出の里も舟たり。东北より松川寺、風極乃峯根亦紀
の川の長流み。吉野、奥の桜うどんざくら、幼男た
木のまみれまくをくまむか浦あくらう崎のうね江
二室ヶ濱、河口泊ぬ菊が波乃うくまでも一眼ふせり凡て
つらうす。あも近文の右兵衛場、うちとくす。を平にまく四條中納言
隆俊へ紀伊國の方ニ幸候ばと奉る。紀伊國、初ケ年に
はをとくまともうよ。國へされば、四月三日、五年、
延文白富ム入道大野
之金守居張守義深、大將、白旗一揆平一揆諒訪親立卒
其の揆大野、一揆彼はを合二万金守、左向う向うけ
勢別故陣、相あつて、わ佐にあつて、二日を進ました先已
陣を掌りて、ほよをす。物語とく、燒津櫓を擇り

井の音へ歡喜寺



臨濟の云々を續いて
禪風がんみづあらへ
雪玉場

あらーが天云か兵火金玉
もふ煙と遙よしのやくと空

金鼓山觀音院

左の如きを善く

鎮宇
松

まちのふとへよ
松尾神社 金毘羅大権現

金毘羅大権現
秋葉大権現

惟現

卷之三

幸堂の

大師堂

あらそん

法の事あらわし又通圓まつやま

四十八年春
師諸國

卷之三

也
見せ
まへ

のれみを

のをふあ

卷之三

神僕の御代ありとて居ても行ふたらまちふ容
あ接へ鬼門より起りて鳥たちの摺約と争ひ
床代拂候の所よし速ふ十種の禍除くあつてと宣ふ大師
欽森のあまう一夕これへるるをとすとあゆまゆ

真後人皇七十二代白河帝のはす承保二至成年六月天下旱れ
此尊像よ雨をのふ勿靈あり真言卷一けまく勅令ふ
よく伽藍と創造しアキトモアリて慈仁元年兵れに營舍
田禄ねぞうとつとも奉るハ惡ちくのきたもひと承半不
安至に星宿たりて大正七年中當ちの付假承意法印ハ資速
の門みくじる像の事を告ありてこれを田堵水攻の參下にて
しく記にあらふ中古けせへて公達宮して安至あやうより
を強日わふてをかの老若教れつともうかうかとを

野の吉戸吉田村あり 日前宮七瀬ノ宿行のそひまうちへ

直川千手川原の余下に入る

蓑笠田村あり

右に口一

太田古城趾太田村の東南にあり今田村と名づけられ

を田村の東南にあり今田村と名づけられ

。

○紀園造家旧記又曰當行ハ往昔より一秀宮御と云ふ

後土御院應仁文明の比天下の私恩付く諸國蜂起の徒地と
畠一城を屠ろてをたまひて時の圓造俊連朝臣紳領の蠶
食されんと私恩と曰へた延徳年中一所にて城郭と築て
防禦に立ちあら所謂秋月の城也飯塙周防守圓造家と云ふ
の城也村伍因幡守日上ニ音義卿の城也田所平左衛門と云て
まひ一ひ而してあらへ則圓造家の居城たり其後ニ親町院
天王の塔雜多の塔雜多孫市なるより小宅卿金手平村の西藏六
芝中野畠の地所を圓造家にありすり合爲ふれよどて
あらぐちりゆう一少少織田内府信長雜多ふらばうつて
政ふと云ひては内田右る助圓造家とて是を接けむ
かあらぐ乗馬と賜へ村の事例をもつての城と接する事例と有るが、圓造家の田所が親町院天王の塔雜多の塔雜多孫市なるより小宅卿の金手平村の西藏六芝中野畠の地所を圓造家にありすり合爲ふれよどて

神君おひでに生れ、信雄を機りて至
るまでは圓徳が
あらん
さんさん
れんじ
みゑ
ちゆう
くけん
胡弓
神君おひでの方の志ありとつとも其處へ日前圓徳の

戸に強占地を植民人地内大半を取る事に田川村の黒里は
さうに紳士を田次より方坐を初め農民本の屈強なる三十余

根本寺の傍徒と牒一合せ名の監事へ姓名をもろ一
元番の主成らまへてへと車下へまつへう

御内侍の御用事は、御内侍の御用事は、
神君御威斜うね御事とて、たまへ
此も廢事日前宮の殿を
ひそてこれに被ふし

おのく頂戴の役根木と泉殿様
さればあづらへがむかひのとん
おやう成一色
トとて即限ま
て先泉川上手内

大坂の城を以て、その領内に在る者を悉く、

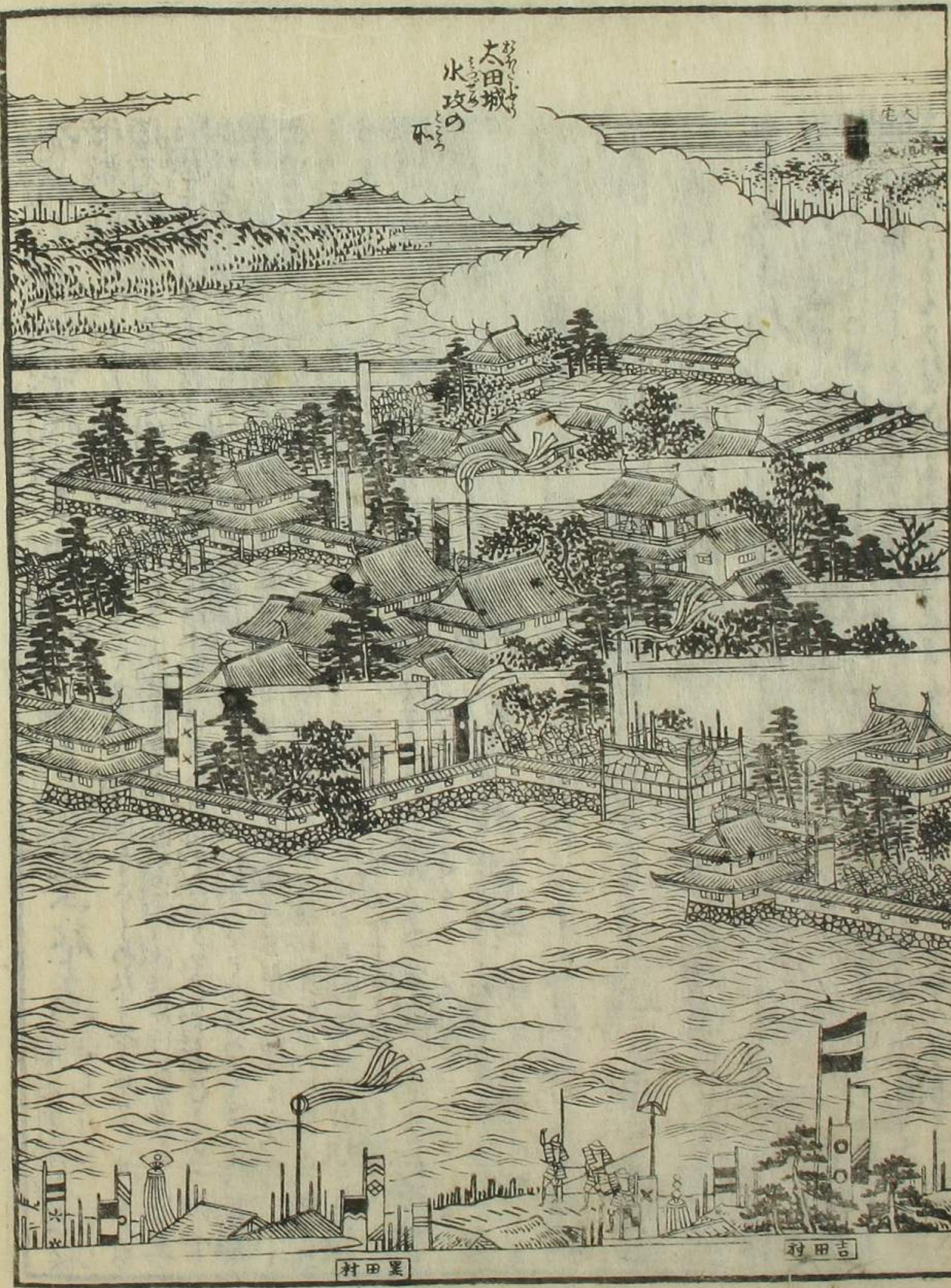
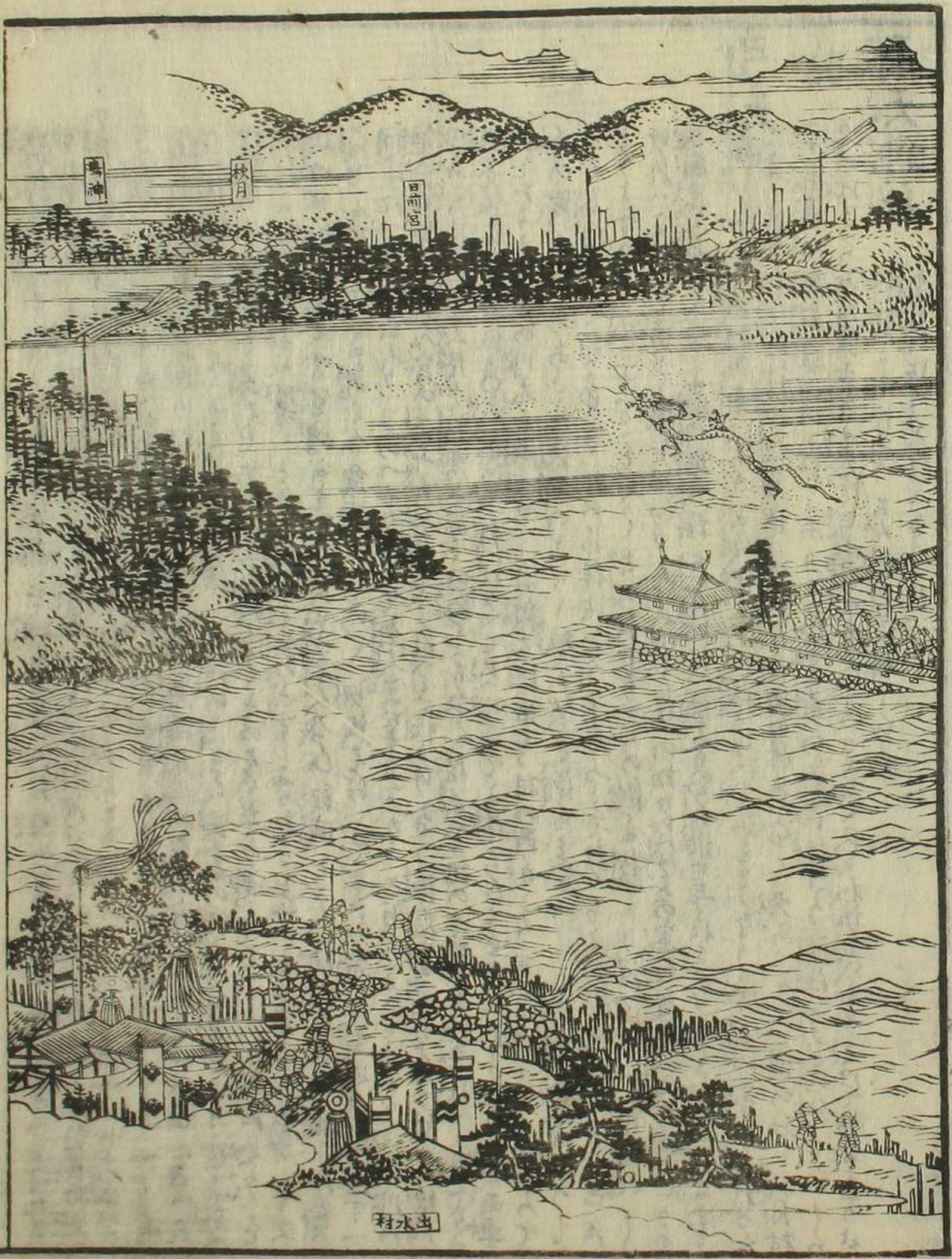
発向へ城主中村孫平次
（後式羽太輔）と合戦ふれよ
（後藤家彦記曰く）

益妻の事は小生の事よりは遠く思ひ難い事で實にイイ仕事
豈か心がけたるのうへて後ろもとがまとめてありまへ達もと
神君の感性は、何ぞ何ぞして機知染めはふ袖といふやうに聞きこのりの、さすがに御心の、さすがに御心の、
ト書と墨足りぬと思ふが、おまかせあれ、おまかせあれ、おまかせあれ、おまかせあれ、おまかせあれ、おまかせあれ、

秀吉の墓碑文

主事一早御出でる事無く此へまことに相承奉と申せば
つゞきの城を田城の水攻め社殿破却し神領をもて没収。

紀の川と激戦を繰り返す。川小余井川へ移り、津守山に陣を構え、
伊豫へ向う。伊豫の城を築き、月日を経て、佐賀守義家に圍攻され、
もろとも敗れ、伊豫守の脇坂元吉をもつと、もろとも敗れてとある。





とんじり はまどる氏祖へ聖感をひくに御どる小姓早着とく 摂川四天王寺
大伽藍へ造立のまぐら早着を作成す あそせらし よう
せく業と みのる豫三島た清門の代より まことの風流俗へ つゝ懸山根來寺
のありて ほんれ居候に 干時天正年中 根來寺堂のむちをか五ひ川ト一年
歎のせが毛しく おもて手さんりの毛うふ
業へるおぼきをいた清門の家の業へ
國祖君もじく 世にあそびてある 手も二月の初
に春盤みねぎを まつやくを此庭みづけ 植え
なまへ次第に生長あまくと 今二百年の歲霜と磨く
益雄壯翠色あざくらめ 僂蓋森まへん千歳乃
色を含め正形化せ 春盤の上あるうてくを
とくにありがふと信えとまことに おもとと見てあ
ねまとくにまへん 小山へ青城の赤債つ飛と
眼下小畠の古城跡内天神社馬主神社あゆ御鉢山花山一眼みて
わらわ世
國君は國よおじなよとそよと東離山
唯恭奉 金にて春盤をく讃とどく ふくはぬがうれせば



紀伊國名所圖會卷之四上終

